

第34回BELCA賞 選考総評

BELCA賞選考委員会 委員長 三井所 清典

BELCA賞は、良好な建築ストックが現代社会の中で生き生きと活用され、未来に引き継がれることを目的に設けられた賞である。賞を2部門に分け、長年にわたり適切に維持保全され、今後も長期保全の計画がある模範的な建築物をロングライフ部門とし、社会の変化に対応したリフォームにより、見事に蘇生した建築物をベストリフォーム部門として選考、平成3年から昨年まで表彰件数325件を数えている。

BELCA賞への関心は年々高まっているが、現代社会で活用されるためには、ロングライフ部門でも耐震改修や設備の抜本的現代化が必要であり、ベストリフォーム部門では建築寿命の長期化に伴い、利用者の建物への愛着を重んじられる傾向が深まっている。そのような事情から近年は両部門の表彰件数は定めず、合わせて10件以内を選考することにしている。本年度はロングライフ部門3件、ベストリフォーム部門7件となった。

今回表彰されるロングライフ部門では、

- ・県下で一番古い木造の教会で、基礎・壁・屋根の耐震補強、玄関・トイレ・乳幼児室などの建替え、外構の整備など教会員の期待に応えたやさしい町の小さな教会。 124歳
- ・かつての宗教関係の学生寮を定期借地権とコーポラティブ方式により共同住宅に改修し、建物の外観の保全、緑環境の保全を居住者と共に進めている日本最古のRC集合住宅。 98歳
- ・キャンパスの歴史ゾーンにある建物の性格と間仕切を整理することで明快なインテリアに改修し、附属機能を別離増築した大学施設で原設計を再現した平屋の小規模会館。 64歳

ベストリフォーム部門では、

- ・瓦の大屋根の外観を壊さず、客席の天井を元通りに復元する手法で、天井内の小屋組を小振りの鉄骨で耐震補強をした歌舞練場で、外周改築部は周辺との調和が図られた施設。 111歳
- ・定期借地権方式でホテルを新設し、江戸後期から大正にかけて建設された茶室と料亭を移築集約改修し、庭園と共に未来に継承する事業を成功させた料亭施設。 109～106歳、一部は157歳以上
- ・初期の本社建物を大規模な再開発に伴い、仮移動後に元の場所に戻し、外観の復元も行い、展示館として再生した建物。かつての印刷技術や本づくりの歴史を楽しく学べる公開施設。 98歳
- ・増築を繰返し、一時は日本一の百貨店となった建物を、外観を保存し、ホテルや展示ホール、レストランに用途を変えて、まちの賑わいに貢献している複合ビル。 96歳
- ・戦後の新しい社会を目指して設計された公会堂を需要の高まった音楽ホールに改修された建物で、外観のデザインを保存して機能と性能を高めた公共の文化施設。 64歳
- ・信用金庫の本店だった建物に、地域の人々が集う機能を付加し、地域の活性化に貢献するよう改修された施設。コーヒーショップなど金融機能以外のスペースを創出している。 60歳
- ・民間マンションが出始めた頃の共同住宅を軽量化に努め、適切な耐震壁を付加してデザインを一新した建物。住戸面積を縮小し、住戸数を増やした設計も成功している。 53歳

今年はベストリフォーム部門が7件と多いが、外観の保存に注力したものが殆どであり、ロングライフ的要素が強く滲んでいることが特徴である。

表彰建築物の「建築年齢」を見ると江戸後期の年齢不詳だが157歳以上とそれと群をなす109歳、106歳の施設があり、他に124歳、111歳の超高齢の建築が3件、続いて98歳が2件、96歳が1件と90歳代が3件ある。若い建築でも64歳が2件、60歳が1件で一番年少は53歳であった。部門別の平均年齢はロングライフ部門が95歳でベストリフォーム部門は91歳であった。

脱炭素社会に向けて努力している建築界において、BELCA賞の受賞建築が、活々として長寿を保っている姿は頼もしく、建築の長寿化の模範であり誇らしい。

最後になりますが、建築の長寿命化務められている関係者の皆様に心からの敬意を表します。